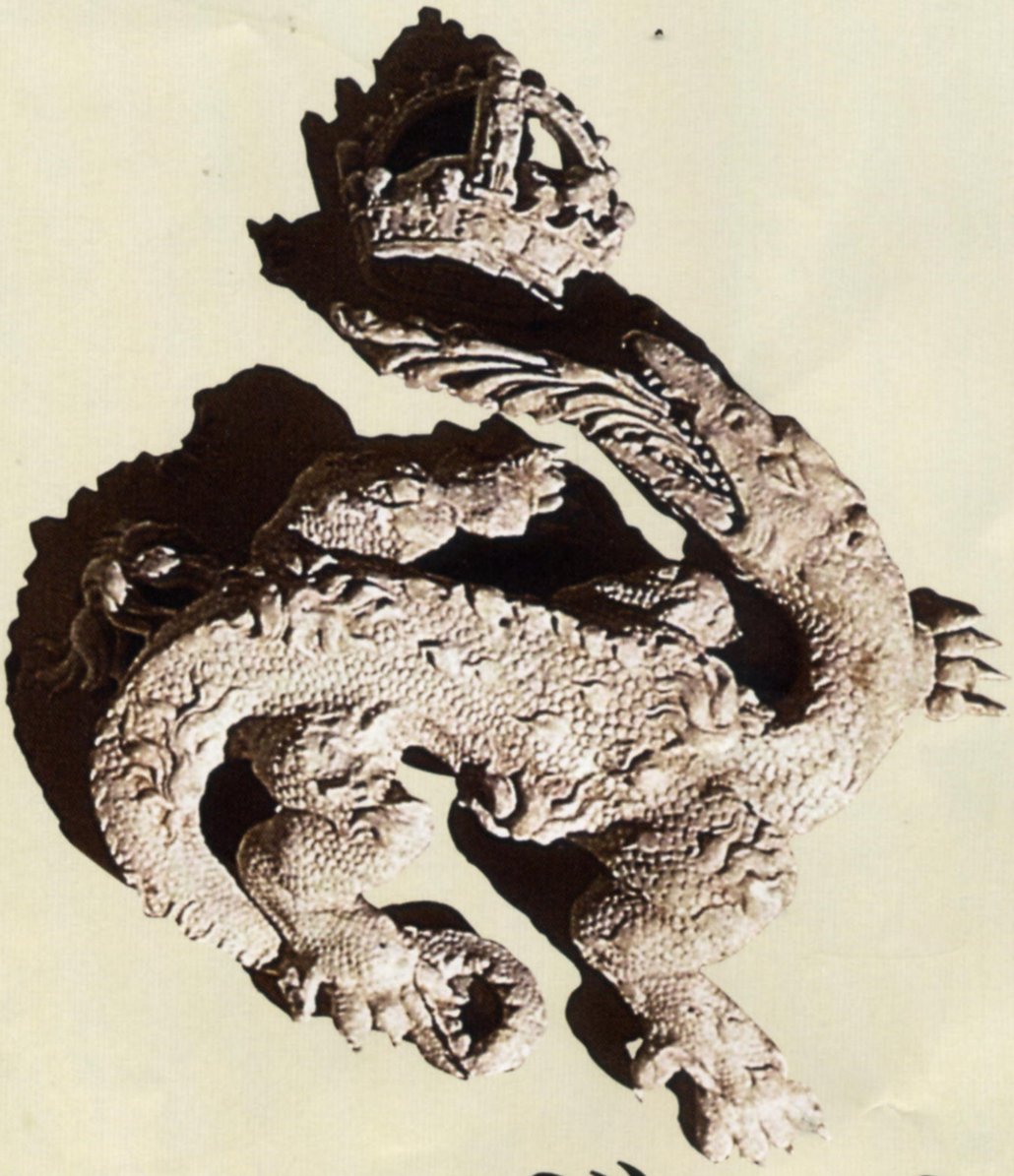


シャンボール

皆様、このたびはシャンボール（国有地）にようこそおいでくださいました。ユネスコの世界文化遺産にも指定され、ヨーロッパでも類を見ない遺産の宝庫に皆様をお迎えできて大変うれしく思います。

シャンボールの見学をより豊かなものにしていただくために、ぜひこのテキストをご利用ください。このパンフレットは参考のためにお渡しするもので、歴史的建造物をより一層ご理解いただけるガイド付き見学やオーディオガイドに取って代わるものではありません。見学にはお決まりのコースはありませんので、お好きな場所からスタートしてください。

1519年、弱冠24歳のフランソワ１世がシャンボール城の膨大な建設工事を着工します。当時、日本では足利将軍による室町幕府の時代で、天皇と戦国大名との争いが絶えず続いていました。千以上に上る軍事要塞としての城が造られたのもこの頃です。

1515年の即位を機にフランソワ１世はイタリアのミラノに遠征し、先代のルイ12世が守れなかった支配を獲得します。マリニャーノの戦いで勝利を飾り、イタリアでルネッサンス様式の建築に触れた若き王は、フランスに帰国後、大きな野心と愛する狩猟のためにシャンボール城の建設に着手します。シャンボールの設計に際して、中世の要塞としての外観（中央の主塔を囲む四隅の大きな塔、2つの翼棟、そしてすべてを囲む城郭）を残しながら、従来のフランス様式にイタリアルネッサンスの革新的な建築様式（ロッジア、テラス、垂直のつけ柱、正面壁にリズムを与える水平の刳形など）を取り入れた斬新な姿にまとまっています。

もともと狩猟用の離宮として考えられていたシャンボールですが、幅156m、高さ56m、77の階段、282の暖炉、426の部屋など城館としてはどれも桁外れの規模です。大きさだけが取柄かといえば、まったくそんなことはありません。バランスが整った優美な姿には現在も多くの人々が魅了されています。城の建設に石灰質の岩から切り出された石を使用しているのも見学者の目を引く点です。この石材は、ロワール渓谷の大多数の城の建設に見られますが、かくも絶妙な技巧で柔らかく脆い石灰岩を用いているのは、おそらくシャンボールだけでしょう。

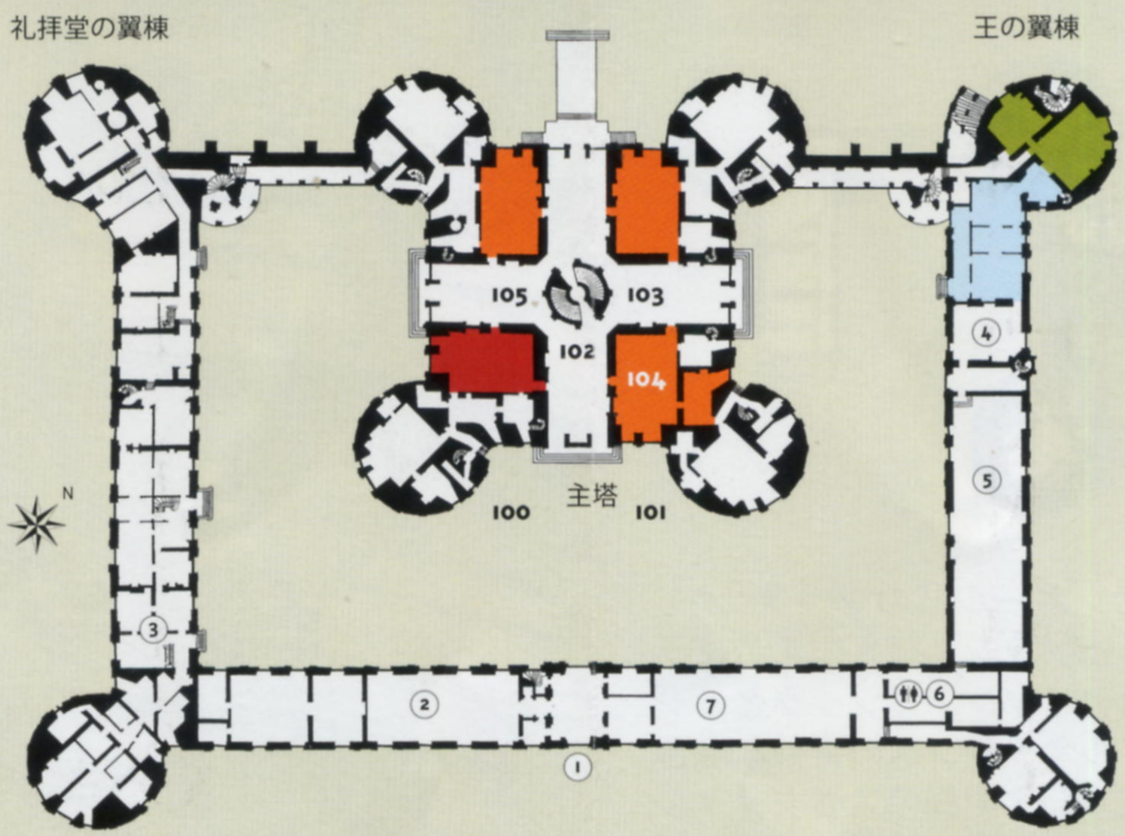
フランソワ１世が、32年間の統治生活でシャンボールで過ごした日数はわずか72日。彼は城の完成を見ることなくこの世を去りました。1547年に死去するまでに出来上がっていたのは、主塔と王室の塔のみで、シャンボールを現在の姿に整えたのは、狩をこよなく愛した息子のアンリ２世とルイ14世の二人です。

シャンボール城の歴史に名を残した主要人物

フランソワ１世（1495 - 1547）フランス国王、彼の命により城の着工が行われました。• **オルレアン公ガストン（1608 - 1660）**ルイ13世の弟、1634年から1643年、1652年から1660年にかけてシャンボール城とブロワ城に滞在。• ルイ14世（1638 - 1715）フランス国王、シャンボール城には1660年から1685年にかけて9回滞在。• **スタニスラス・レクチンスキー（1677 - 1766）**ポーランド国王の座を追われ亡命してきた王。ルイ15世の義父。1725年から1733年にかけて城に居住。• **サックス元帥（1696 - 1750）**ルイ15世の領地を受領した彼は、2年間ここで豪華な祝宴を催します。• **ボルドー公、シャンボール伯爵（1820 - 1883）**シャルル10世の孫、1821年に国民より城が献納されました。• フランス政府が1930年にシャンボール伯爵の後継者から城を買い取りました。

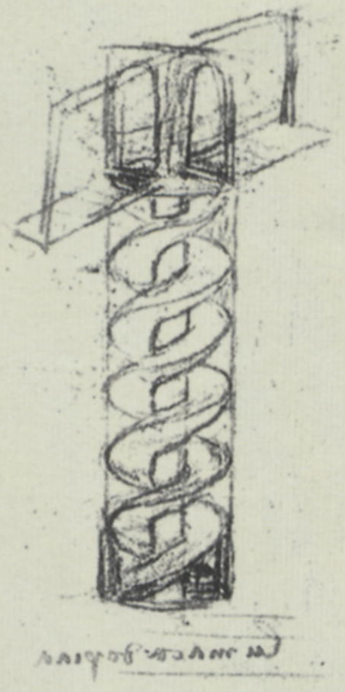
1階

① 王の門・入口
② 入場券売り場
③ 警察官詰所
④ カフェテリア（セルフサービス）
⑤ オルレアンの付属建物
⑥ 化粧室
⑦ 売店・出口
■ オーディオビジュアルルーム
■ 馬車の間
■ 資料館
■ レセプションルーム
100 オーディオガイドの番号



©CMN, Alain Lonchampt

©CMN, Alain Lonchampt


© Bibliothèque de l'Institut

主塔と階段

主塔の中心部分に、城館の3つの階をつなぐ有名な二重螺旋階段があります。これは中心の空間部の周りに取り付けられた二重構造の螺旋階段です。階段部分の上方には、ユリの花を戴いた頂塔があります。一方の階段からは、他方の階段を通る人の姿を中心の空間部から垣間見ることができますが、決してすれ違うことはありません。その彫刻装飾は、フランス・ルネッサンスの傑作の一つとして数えられています。各階では、この階段を中心に十字型の放射状に4部屋が広がり、4つの均等な居住区域を形成しています。この原案自体、当時のフランスでは非常に革新的であることと、中央階段の傑出した技巧などを見ても、おそらくこの設計にはフランソワ1世が1516年以降にフランスに招いたレオナルド・ダ・ヴィンチが関わっているのではないかといわれています。

馬車の間

1871年に馬車職人のビンデールがシャンボール伯爵のために作ったこれらの馬車は、ついに一度も使われることはありませんでした。馬具一式はパリの老舗エルメス社製です。

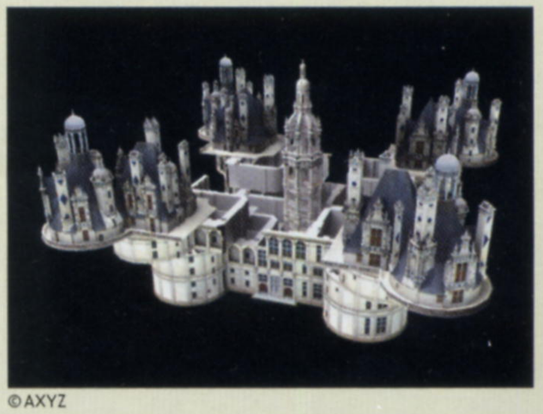
©CMN, Philippe Berthé

詳しい情報をご希望の方は、
オーディオビジュアルルームへ

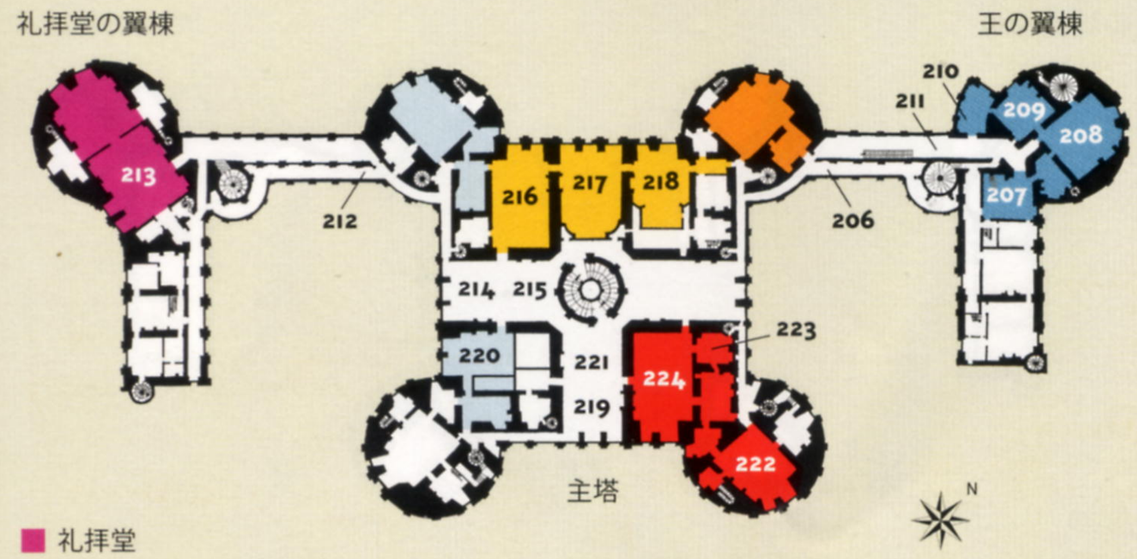
コンピュータグラフィックを用いた15分間のビデオで、城の歴史と建設の概要がご覧になれます（説明はフランス語、英語、イタリア語）。オーディオビジュアルによるこの資料は、皆様のご見学に欠かせないものです。

城館の各階の間にはパネルが用意されており、詳しい情報がご覧になれます。それぞれのパネルの色はこのパンフレットの図にあるものと対応しています。

© Dominic Hofbauer


©AXYZ

2階：歴代国王の居室



- 礼拝堂
- 王の居室
- 王妃の居室
- フランソワ１世の住居
- 18世紀の続きの間
- シャンボール伯爵の記念館

200 オーディオガイドの番号

©Dominic Hofbauer

©CMN, Philippe Berthé

2階では、16世紀から19世紀にかけての様々な住居形態がご覧いただけます。各所に展示されている調度品からその当時の生活の様子がうかがえます。

礼拝堂

フランソワ１世の命により、礼拝堂は彼の住居と同じ高さの場所で着工が始まり、ルイ14世の代に、ヴェルサイユの建築家ジュール・アルドゥアン・マンサールによってようやく完成します。目を見張るような空間のこの礼拝堂は、城館の中で最も広い部屋です。

フランソワ１世の住居

王は主塔に置かれていた住居を、回廊や相接する螺旋階段から出入りが可能な東の翼棟に移すことを決定しました。この翼棟は、寝室、2つの小部屋、小さな礼拝堂、執務室からなる全270m²のフロアでしたが、17世紀初頭にオルレアン公ガストン（ルイ13世の弟でルイ14世の叔父）によって分割されています。

王の居室

1680年、ルイ14世統治下の礼儀作法に則り、北側の広間を仕切ることにより2区間が統一されました。その間取りはヴェルサイユ宮殿のように、衛兵の間、第1の控えの間、第2の控えの間、王の寝室、閣議の間と続いています。今日の装飾は、サックス元帥のために施されたものです（18世紀）。調度品は当時の情報を元に復元されています。

王妃の居室

王の居室に隣接した塔に王妃の居室があります。ルイ14世の王妃マリ・テレーズ、次にマントノン夫人がここに住んでいました。この居室も衛兵の間、2つの控えの間、寝室、閣議の間で構成されています。控えの間の1つは、19世紀にベリー公爵夫人の手で食堂に改装されました。

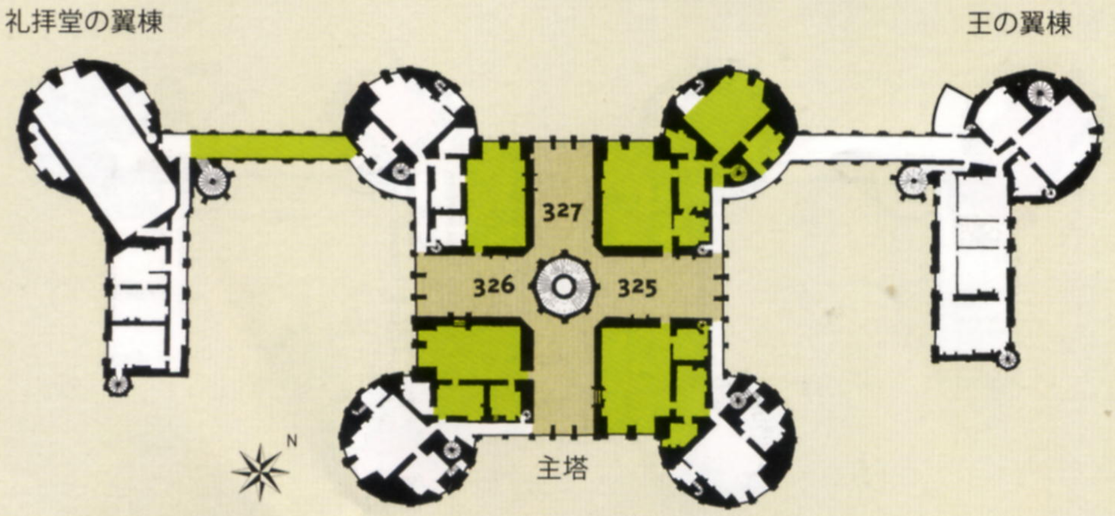
18世紀の続きの間

18世紀ほどシャンボールに多くの人が住んだ時代はありません（12年）。これらの部屋には、スタニスラス・レクチンスキーやサックス元帥の親しい友人やシャンボールの総督らが住んでいます。フランソワ１世以来、快適さに対する考え方はかなり変化しています。防寒対策として仕切りにより一部屋の面積を小さくし、寝台の窪みが設けられ天井も低くなりました。16世紀の大きな暖炉には、小さな暖炉がはめ込まれています。

シャンボール伯爵の記念館

フランスの歴史においても特筆すべき時代を思い起こすために、居住区域の一つを記念館に改装しています。シャンボール伯爵が1821年に城を入手して1883年に死去するまでの間、この城に滞在したのはたったの３日間です。1871年にフランスがプロイセンに敗れた際、ブルボン家の最後の後継者として王への即位を求められたシャンボール伯爵は、これを拒み、フランスは第三共和制に移行します。この記念館には、伯爵の戦争のおもちゃコレクション、食器・銀製品、豪華寝台に加え、母親のベリー公爵夫人が所有していた彫刻品、肖像画の数々が展示されています。

3階



■ 格天井の彫刻
■ 狩猟と自然の博物館
300 オーディオガイドの番号

格天井の彫刻装飾

3階大広間の格天井は、シャンボール城で見逃せないものの一つです。その彫刻にはフランソワ１世の王室文字である「F」と、火に棲むという伝説の生き物サラマンダーが見えます。シャンボールの随所に見られるサラマンダーは、《nutrisco et extinguo》(「聖なる炎を養い、悪の炎を駆逐する」) という王室の格言を象徴するものです。

格天井とテラスでは現在修復活動が行われています。テラスからの水の浸入により格間が徐々に傷むのを防ぐためです。

©CMN, Pascal Lemaître

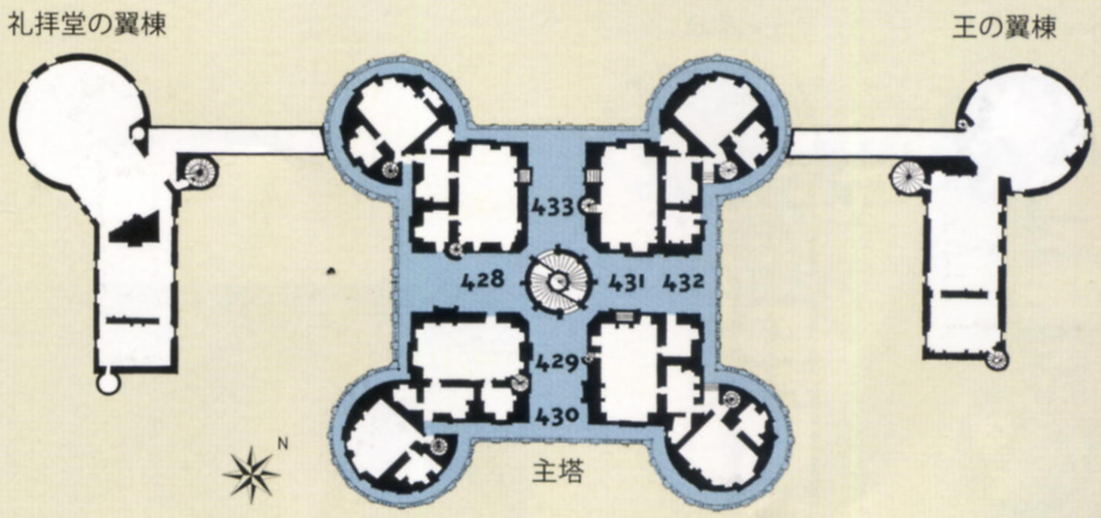
©photo DR

狩猟と自然の博物館

フランソワ１世の狩猟への思い入れなくしては、シャンボールは存在しませんでした。3階は狩猟がテーマです。北区域では16世紀の様々な狩猟形態を追ってご覧になれます。他の区域には、狩猟にまつわる古代神話を題材にしたタペストリーのコレクションが展示されています。狩猟は芸術家たちにとってインスピレーションの無尽蔵の源だったことがうかがえます。

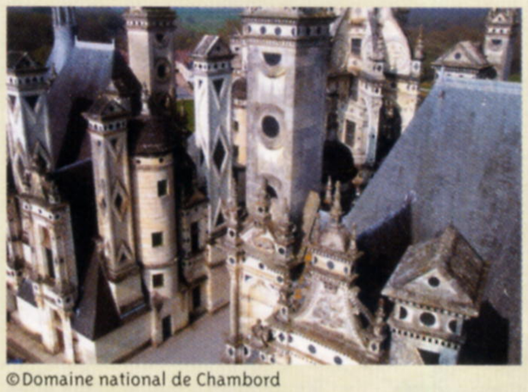
様々な季節の催しにより、展示品が変わる場合があります。詳しくは各パネルをご覧ください。

テラス



■ 景観パノラマ
400 オーディオガイドの番号

シャンボール城のテラス――。そこはフランス職人によるフランボアイヤン・ゴシックとイタリアルネッサンスの奇妙な融合が織りなす屋根のスペクタクルであり、シャンボールの敷地を一面に見渡せる大パノラマでもあるのです。城館からの眺めを写真に収めるにはピッタリの場所です。


©Domaine national de Chambord

©Francis Forget

公園

6カ所の出入り口のある全長32kmの壁に囲まれた総面積5440ヘクタールの敷地はパリ市の大きさに匹敵し、今日、ヨーロッパ最大の森林公園となっています。 国の狩猟鳥獣保護区となっているシャンボールには、あらゆる野生動物が自由に棲息しています。標識により一般の立ち入りが許されている800ヘクタールに及ぶ自然遊歩道では、時折イノシシや鹿の姿を見ることができます。

城館の入り口または村の観光案内スポットで公園の地図をお渡ししています。

このたびのご見学にご満足いただけましたでしょうか。シャンボール城スタッフ一同では、皆様のご意見をお待ちしております。案内所に記帳簿を用意してありますのでご利用ください。

©photo DR

Polymago 08, Corinne Geney. Couverture : ©photo CMN, Etienne Revault.

© Eric Isselée